

植物種子のはるかな旅(ささやかな動物的な生存戦略)

片桐知之ら・東城研・佐藤研・島野研

「種子の行動学:Ethology of seeds」これは片桐の夢である。動物社会学者、東正剛教授(アリの生態学者:北海道大学大学院地球環境科学)のことは借りると、「植物の種子は動物である」なぜなら「植物は種子時代に移動する」からである。植物の種子はじつに巧みな多様な移動手段をもっている。

- (1) 風による移動 (2) 動物による移動
- (3) 人間による移動 (4) 自分で動き回る

できるだけ空中にただよふことで種子は遠くに散布される。くるくる回るタネ(イタヤカエデ・ツクバネなど)、風で遠くに飛ぶタネ(タンポポなど)、ヒトや動物の体表につくカギをもったタネ(ダイコンソウなど)、水に流されるタネ

(ヤナギなど)、きわみは動物に食べられて移動する多くの作物やくだものがある。人間の食料とされながら生命を繋ぐつなぐ植物がある。われわれも他人に生かされながら生きていく。「忙しいでしょう?」「おかげさまで・・・」信大理の竹下先生(物理学者)のことばである。

植物の種子をみると複雑な気持ちになる。種子はみなかわいらしい形をもつ(おとなの植物よりも球にちかい?)。ひとつだけさびしいことに、種子は決して母親の近くでは生き残れないこと・・・(文責 佐藤)。

何と世界1大きなタネは直径1メートルを越えるとも言われる。さて何だろう(フタゴヤシ?)。

今回は、自分で転がる種子として、イネの仲間のカラスムギを紹介する。カラスムギの種子には動物の足のよ
うな長い禾(ノギ)というものが付いている。この禾(ノギ)の足で動く種子の様子を実際に見てみよう!(片桐)